

令和4年 2月25日	病害虫発生予報 3月号	茨城県病害虫防除所
---------------	------------------------------	-----------

農薬は、専用の保管庫に鍵をかけて適切に管理しましょう。


＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：灰色かび病	1
促成トマト：葉かび病	1
春レタス：菌核病	2
【防除所レポート】	
サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）	3
【その他の病害虫】	
イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、春ハクサイ、春レタス	4
【防除所レポート】	
令和3年の水稻における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況	5
II. 今月の気象予報	
	6

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. 灰色かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、発病果率（本年値 0.05%、平年値 0.02%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 20%、平年値 4%）は平年より高い。
- ② 2月下旬現在、発病株率（本年値 0.8%、平年値 0.7%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 13%）ともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤を用いてローテーション散布する。
- ④ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成トマト

1. 葉かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、発病度*（本年値 1.0、平年値 0.2）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 22%、平年値 3%）は平年より高い。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため、暖房、送風、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 抵抗性品種であっても発生することがあるので注意する。
- ③ 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ④ 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤を用いてローテーション散布する。

春レタス

1. 菌核病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県西地域

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、発病株率（本年値 0.8%、平年値 1.1%）は平年並～やや高く、発生地点率（本年値 40%、平年値 18%）は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため、換気によりトンネル内の湿度を低く保つ。
② 発病株は、菌核が形成される前に圃場外に持ち出し、適切に処分する。
③ 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。また、薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にも届くよう、十分な量で丁寧に行う。

サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）

本病は、平成30年に沖縄県で初確認され、令和3年6月に茨城県でも発生が確認されました。令和4年2月現在、25都道県で発生が確認されています。発生すると防除が難しく、被害が拡大するおそれがあるので、侵入防止と早期発見に努めましょう。

[病気の特徴]

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（葉や茎の残がい）等が伝染源となる。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、注意が必要である。

[防除対策]

<育苗にあたって>

- ・ 発生地域から種イモや苗を持ち込まない。
- ・ 苗の増殖にはウイルスフリー苗を用いる。
- ・ 来歴が不明な種イモ、切り苗は絶対に使用しない。

<作業にあたって>

- ・ 発生地域から持ち込まれたコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、作物の残さや土を圃場に持ち込まない。
- ・ 作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土をよく落とし、水でよく洗浄する。

<健全な苗を確保するために>

[育苗準備]

- ・ 種イモから苗を増殖する場合は、病害等の発生していない圃場で生産されたイモを用いる。
- ・ 伏せ込む前の種イモには腐りや傷のない健全なイモを選び、黒斑病対策として種イモ消毒を行う。

[採苗時]

- ・ 自分で採苗する場合は、ハサミをこまめに消毒しながら、地際から5cm以上の位置で採取する。
- ・ 見かけ上は健全な苗でも保菌している可能性がある。ウイルスフリー苗から増殖した場合も含め、採苗した苗は採苗当日に、速やかに消毒する。
※苗消毒用の薬液は、使用当日に調整し、翌日以降に持ち越さない。
- ・ 切り苗を購入するときは、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒する。

[育苗終了後]

- ・ 育苗終了後は、苗床の残さを育苗ハウスから持ち出して適切に処分する。
- ・ 苗床は、耕うんして分解を促したのち、梅雨明け後の高温期に太陽熱消毒を行う。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、抜き取り等を行わず、速やかに各地域の農業改良普及センターまでご連絡ください。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	ハダニ類		
促成ピーマン	灰色かび病	発生量：平年並 ～やや多い	2月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	斑点病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや少ない	2月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
促成トマト	灰色かび病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：やや多い	2月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	灰色かび病	発生量：平年並 ～やや多い	2月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	オンシツコナジラミ	発生量：やや多い	2月下旬現在、平年よりやや多い発生である。一部圃場で発生が認められている。
春ハクサイ	白斑病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	べと病		
春レタス	腐敗病	発生量：多い	2月下旬現在、平年より多い発生である。 凍霜害による傷口から病原菌が侵入し、発病する。 高温・多湿条件が発生を助長するため、換気を十分に行う。

令和3年の水稲における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況

水稲巡回調査圃場での斑点米カメムシ類(以下、カメムシ類)のすくい取り調査および普及センターの水稲定点調査圃場の調査米(以下、定点調査米)の斑点米等発生調査の結果をもとに、令和3年の水稲におけるカメムシ類と斑点米の発生状況についてまとめましたので、次作の参考にしてください。

【調査方法および結果の概要】

1. カメムシ類の発生状況調査(すくい取り調査)

水稲巡回調査圃場57地点において、7~8月にカメムシ類のすくい取り調査を行った。

8月上旬の虫数は、イネカメムシで平年より多く、クモヘリカメムシ(以下、クモヘリ)で平年よりやや少なかった。発生状況を種別・地域別にまとめると、イネカメムシが県央、鹿行、県南および県西での優占種であり、全県では捕獲されたカメムシ類の75%を占めた。県北ではクモヘリが優占種であった。アカスジカスミカメ(以下、アカスジ)は鹿行で多かった。(データ省略)

2. 斑点米等の発生状況調査

定点調査米計37点について、斑点米等の発生粒数を被害部位・種類別に調査した。

精玄米1,000粒当たりの斑点米等の発生粒数は、県西で2.8粒、県央で2.3粒と多く、その他の地域では0.9~1.5粒、全県平均では1.8粒であった。被害部位別では、基部が73%と最も多く、次いで側部が20%を占めた。地域別にみると、県北では側部(34%)と頂部(31%)、県央では基部(76%)、鹿行では側部(76%)、県南では基部(75%)、県西では基部(91%)が多かった(表1)。本年産の斑点米等発生粒数は、過去11年中4位で、平年よりやや多かった。(図1)。

表1 普及センター水稲定点調査圃場における斑点米等発生状況

地域(圃場数)	被害部位・種類における発生粒数(粒/精玄米1,000粒) ¹⁾				合計
	側部 ²⁾	基部	頂部	カメムシ黒点米 ³⁾	
県北(4)	0.5(34%) ⁴⁾	0.4(24%)	0.5(31%)	0.2(10%)	1.5
県央(6)	0.4(18%)	1.7(76%)	0.1(3%)	0.1(3%)	2.3
鹿行(6)	0.7(76%)	0.1(10%)	0.1(14%)	0(0%)	1.0
県南(10)	0.1(16%)	0.7(75%)	0.0(2%)	0.1(7%)	0.9
県西(11)	0.2(8%)	2.5(91%)	0(0%)	0(1%)	2.8
全県(37)	0.3(20%)	1.3(73%)	0.1(5%)	0(3%)	1.8



基部被害

1) 数値は四捨五入しており、部位・種類別の計と合計が一致しないことがある

2) 背部、腹部を含む

3) 頂部被害とくさび状の裂開がみられるもの

4) 括弧内の数値は部位・種類別の割合を示す

【考察】

各種カメムシ類が加害する部位は、クモヘリが側部、イネカメムシが基部、アカスジは頂部であることが多いとされている。被害部位別の発生粒数に基づいてカメムシ類の加害種を地域別に推測したところ、県北ではクモヘリとアカスジ、県央、県南、県西ではイネカメムシ、鹿行ではクモヘリが多かったと考えられた。県全体としては、基部被害が多く見られ、イネカメムシの加害が多かったと推察された。イネカメムシは、8月上旬のすくい取り調査でも発生が平年より多く、県央、鹿行、県南および県西での優占種となっており、引き続きイネカメムシの発生に注意する必要があると考えられる。

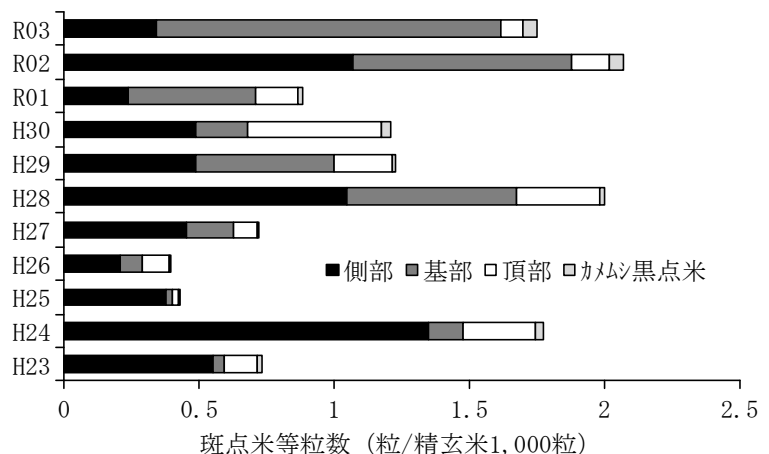


図1 普及センター水稲定点調査圃場における斑点米等発生状況の年次推移

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 2月26日から3月25日)

気象庁(2月24日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	40	30	30
日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 2月26日(土曜日)から3月4日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率40%

<2週目の予報> 3月5日(土曜日)から3月11日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<3週目から4週目の予報> 3月12日(土曜日)から3月25日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。